令和5年度 京都教育大学附属高等学校 学校評価

1	評価項目の達成状況
2	達成率
3	達成率の向上に向けた取組
4	達成率の向上に向けた取組

①教育活動その他の学校運営に関する事項(学校教育法に基づく評価)

本年度の重点目標	具体的な取り組み内容	自己点検評価	自己評価区分	学校関係者評価	改善策
(1) 教科間連携を強化し、生徒の総合的な学力向上につながる探究型授業の確立	<ul style="list-style-type: none"> 各教科における基礎・基本の徹底を基盤とし、自らの課題を設定し、問題解決に活用できる総合的な学力を育成する。 教科間の有機的なつながりを強化し、思考力・判断力・表現力に加え、読解力の育成を目指した探究型授業を実施し、高大接続改革で求められる学力を定着させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 探究活動と確かな学力の育成を両輪とした教育課程のなかで、知識・技能や思考力・判断力・表現力の育成とともに、主体的に学びに向かう力の育成を図った。1年の総合的な探究の時間では、5教科の担当者が連携し、学び方を学び、自分の課題を見つける力を育成することに努めた。2年の総合的な探究の時間では、1年次の総合的な探究の時間で習得した探究の基礎的な知識、技能や、幅広い分野の活動で得られた思考、判断、表現力を踏まえて、6教科に及ぶ担当で専門的な探究活動を行い自己の在り方生き方と密接に関わる進路実現や今後のキャリア形成につながる事柄に深い関心と幅広い視点を持ち、个性的で総合的な発想力が発揮できる生徒の育成に努めた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 探究型授業で身につけた経験と知見は、社会人になった時に必ず役立つ。想定外のことに対処できる人材の教育を引き続き期待したい。 自己点検評価において、「A」評価となっているが、関連項目のアンケート結果においては「できている」「ややできている」が約50%であり、「どちらでもない」「あまりできていない」の割合も結構高いのが気になる。 	<ul style="list-style-type: none"> 1年次から2年次への取組のつながりをより意識し、自己理解から進路実現につなげていきたい。
(2) 生徒一人ひとりの進路実現に向けた計画的な進路指導体制の確立	<ul style="list-style-type: none"> 学年、分掌の綿密な連携を基盤とした指導体制のもと、個人面談などを通じて個々の生徒に適した進路指導を実施し、生徒一人ひとりの進路実現に向けたきめ細やかな支援を図る。 3年間の進路指導計画を明確化し、計画に沿った進路ガイダンス、進路ホームルームなどを通じ、生徒、保護者に対して、適切な進路情報を効果的に発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学年と教務部、研究部が連携し、進路指導の充実に向けて校内・校外の様々な情報を収集し、個人面談に有効活用した。様々な大学の協力のもと、生徒・保護者が参加可能な説明会を実施し、多くの生徒・保護者が参加し、質問や相談ができる機会を設けた。 3年間を見通した進路計画に基づき、様々な機会を通して正確な情報発信に努めた。生徒の希望進路の多様化に対応すべく、個人面談や三者面談を通して進路情報を発信した。 受験を終えたばかりの3年生の協力を受け、下級生への受験報告会を実施し、活きた受験情報を得る機会を設定した。 総合型選抜の志願者が年々増えており、志望理由書などの出願書類の書き方の指導や、模擬面接の指導などの人員が不足する傾向にある。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 新聞にも総合型選抜の志願者が年々増えていると記事にあった。しかし、大学入学後の学力差は一般入試と差がないとのことであった。高校で志望理由書などの出願書類の書き方の指導や、模擬面接の指導などの人員が不足しないよう努めてもらえば、保護者としてありがたい。 自己評価「B」ではあるが、指導と方針の関連項目では人員不足傾向の中においても努力されているようであり、生徒一人ひとりに向き合う最善策は取られているのではないかと。 受験を終えたばかりの3年生による受験報告会は、きめ細やかに実施すれば、大変いいのではと思った。 	<ul style="list-style-type: none"> 入試関連の情報や模試の結果に対するアドバイスができるよう、教員向けの研修を行い、組織的に生徒の学力充実と伸長を図りたい。
(3) 自らの意思で社会生活に適応できる、自律的で高い人権意識を持った生徒の育成	<ul style="list-style-type: none"> 教育活動や自主的活動など他者と協働する様々な機会を通して、自律した人間として自己管理ができることと、周囲の人間を思いやることのできる高い人権意識を持った生徒の育成に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 文化祭や体育祭などの学校行事や部活動をコロナ禍以前の状態に戻して実施するなど、他者との協働の機会を通じ、自律した人間として自己管理ができる生徒の育成に努めた。 基本的な生活習慣の指導として、遅刻生徒への個別指導、毎朝の校門指導、服装・身だしなみの指導を、学年・分掌が連携し、年間を通して継続指導を行った。 年2回の人権学習および日々の授業・学校行事を通して人権意識の向上を図った。今後も、生徒の人権意識の向上に向けた取組を継続して行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 全附P連、近附P連の研修でも人権問題、いじめに対するテーマが多いように感じている。多様性が高まるこれからの時代に対応できるように引き続き取り組んでいくことを期待する。 生徒達が社会人として生きの中で非常に大切な部分で、豊富な学力・知識を持ち合わせていても、人間力の持ち合わせがなければ、社会人として通用しない。それに関する教育に力をそそぎ、「A」評価は素晴らしい一方、少数ではあるものの、遅刻する生徒がいるようで、心配要素である。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後も文化祭や体育祭などの学校行事の取組を通じて、自律的・自立的かつ人権意識の高い生徒の育成の充実を図りたい。 生徒の人権意識と各学年の実情に照らし合わせ、テーマの内容を精査し、次年度に向けた取り組みを計画していきたい。
(4) 現代的教育課題に則した教育研究の成果の還元と新たな開発	<ul style="list-style-type: none"> 今日的な教育課題に則した教育研究を推進し、その成果を地域の学校等に還元することで、研究校としての使命を果たす。 京教リベラルアーツアクティビティやグローバル人材育成プログラムを活用し、本学との連携強化を図り、教科融合型の探究活動を軸とした授業開発を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 日英SWやスーパーカミオカンデ研修などの京教リベラルアーツアクティビティ活動(以下京教LA2)をコロナ禍以前の状態に戻して実施したほか、様々なアクティビティを実施することができた。 京教LA2に関しては、人手不足や負担の大きさなどの問題を抱えている。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 京教リベラルアーツアクティビティ活動はいい取組みである。可能であれば、数年おきに時代に適した内容にアップデートしていくことを期待する。 自己評価は「A」となっていることから、満足と言えない人手不足という環境の中でも教職員としては相当な努力をしていると思え、評価に値するものだと考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 実施するアクティビティの精選や、活動の形態や内容の変更などを検討していきたい。 担当者によって実現が可能だったアクティビティ活動もあるので、引継ぎを行い、部署で実施できるようにしていきたい。
(5) 学校の教育活動の情報発信の効率化	<ul style="list-style-type: none"> 本校ホームページの改善を実施し、提供する情報内容の充実を図り、本校の教育活動をより広く効果的に発信する。 教員の共通理解のもと、中学生や教育関係者へ、本校の教育活動の特徴を具体的にかつ積極的に発信できる広報活動を展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> 受検者が減少傾向にあり、一般入試で志願者が募集定員を大幅に割った。中高一貫化の周知や、私立高校受検者の増加などの要因が考えられる。 本校のセールスポイントと中学生のニーズのバランスの分析や、有効な広報素材の確保が必要である。 中学校訪問や学校説明会においても、本校の教育活動について、効果的な広報活動や発信方法を考え、広報内容・方法を変えていく必要がある。 ホームページの改善が進んでいない。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 是非とも高校のWebサイトや、中学生に対する広報活動の改善を進めて欲しい。 本項目は、従来から自己評価が低い結果となっている。ネット上においても附属校に対する悪意に満ちた投稿が多く存在することも事実である。これらを払拭する為にも、職員不足という厳しい環境の中においても内容の充実を図る等打開策が必要である。受験生が減っているようだが、地元周辺の子供たちに愛される、興味を持たれる高校になるよう努力をしてほしい。 ホームページは確かに見づらくあまり面白くない。しかし、生徒、保護者のアンケート結果を見るとそう悪くない。あまりHP作りに力を注ぐ必要はないのかもしれない。もし外部の閲覧を意識するなら動画を増やせばいいかもしれない。 	<ul style="list-style-type: none"> より多くの人に本校の良さを知ってもらうため、広報スケジュールを変更したい。 ホームページについては、コンテンツの整理やデザインの変更は今後努めていきたい。
(6) 教育環境の整備と充実	<ul style="list-style-type: none"> 生徒および教職員の心身の健康、安全のため、定期的な教育環境の点検を実施する。 環境整備の必要な箇所を精査し、効果的かつ効率的に整備を進めていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 定期健康診断については、学校医の協力を得て予定通り実施することができた。また、照度検査、水質検査などを実施した。 コロナ禍で実施できなかった、朝学習、朝練習の再開や、ロッカー室のシャワー室の利用の再開など、教育環境の改善に努めた。 コンピュータ教室のパソコンを更新するなど、ICT環境の改善を行った。 校門の老朽化が進んでおり、次年度に改修を検討している。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 世界のDX化の流れに対応するためにも、パソコンやそれに関連するICT環境の整備は重要である。生徒、教職員の健康の維持、老朽化した設備の更新も引き続き検討を願う。 生徒及び教職員の心身の健康の為にも教育環境の整備が大切との捉え方をされており、それが結果として働き方改革へも関連してくる部分もあり、限られた予算の中での自己評価「A」は、教職員の努力が伝わってくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 予算の範囲内で、的確な優先順位の下、効率よく環境整備を行うようにしたい。 60周年の記念事業の一貫として、門の改修を行う予定である。

②附属学校の機能向上に関する事項

本年度の重点目標	具体的な取り組み内容	自己点検評価	自己評価区分	学校関係者評価	改善策
(1) 教育研究活動の成果を公表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・本学教育創生リージョナルセンター機構との共催、京都府・京都市教育委員会の後援により、研究発表会を開催する。 ・教育委員会や学校関係者等の学校訪問を積極的に受け入れ、本校の先進的な取組を積極的に発信する。 ・研究成果を地域の教育に還元するための教員研修プログラムを検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2月に、「『評価』の活用」というテーマで高等学校教育実践研究集会を実施し、本学との連携のもと、地歴公民科、数学科、保健体育科、家庭科の教員による公開授業や、本学教授を助言者に迎え他校の教員との研究協議や、京都大学大学院教育学研究科准教授の奥村好美先生による講演会などを行った。併せて、総合的な探究の時間における生徒による研究発表も行った。近畿圏の学校だけでなく、全国各地から参加者があり、各分科会において有意義な成果発表・意見交流の場となった。 ・5月に台中女子高級中学の生徒29名、教員2名が訪問し、日本の文化交流や、授業で取り組んだ研究について互いに発表し、意見を交流した。 ・研究成果の地域還元のための教員研修プログラムは実施できなかった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・国立大学附属学校にとって教育研究は使命のひとつである。今後は教員研修プログラムを実施し、研究成果の地域還元を進めてほしい。 ・様々な取り組みを行っており、それぞれが高評価を得ていることが窺われるが、研究成果の地域還元のための教員研修プログラムが実施できなかったことから、自己評価「B」だとすれば、人手不足の中での活動であり、マイナス評価の原因把握が出来ていれば、それも止む無しと思われる。来期の改善を期待する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も教育研究成果がさらに還元できるように努めたい。 ・本学との共同研究だけでなく、中高一貫となる附属桃山中学校とも、共同研究ができる事があれば連携していきたい。
(2) 大学と附属学校園とが連携した研究を実施する。	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の「グローバル人材育成プログラム」事業において本校で取り組んだ成果を積極的に授業で活用する。 ・京教リベラルアーツアクティビティにおいて、本学学生の教員養成の場として活用を図るとともに、大学教員と連携を深め研究を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・総合的な探究の時間（特に2年生文系）において、国語科と英語科が連携して、グローバル人材育成プログラム事業における成果を、積極的に活用・実践し、教育実践研究集会の公開授業におけるポスターセッションで発信することができた。 ・「放電現象の探究」、「科学クラブ」では本学大学教員の指導のもと実施、「人文・社会科学の世界ふしぎ発見！～大学生と学問の林を歩く～」、「臨海実習」、「研究室訪問 京都大学桂キャンパス 分析化学に関する講義・実験－マイクロ・ナノスケールの分離分析－」では京都大学や龍谷大学の大学教員の指導のもと実施した。 ・「情報クラブ」や「哲学カフェ」などの京教リベラルアーツアクティビティでは、本学2回生の参加研究習を実施した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・大学と連携した京教リベラルアーツアクティビティは、本校の強みのひとつである。今後も継続して成果の発信をお願いしたい。 ・生徒にとって、大学との連携教育により現場でしか味わうことが出来ないものを体験し、自己の将来への足固めとして、非常に良い時間を送ることが出来るものと考えられ、自己評価「A」は価値ある努力があったのだらうと考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学との連携強化を図り、さまざまな教育研究が学校全体としての充実した取り組みになるようにさらに推進したい。 ・大学の方針に基づき、実践的教育研究に努め、その成果を質の高い教員養成に活かしていくようにさらなる改善を図りたい。
(3) 総合教育臨床センター学びサポート室と連携する。	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の学びサポート室と連携し、特別な配慮を要する生徒への支援を行い、生徒の希望進路実現に向けた教育を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・担任や養護教諭が学びサポート室の専門医および講師と連携して、不登校や人間関係の形成が困難な生徒または生徒の保護者との面談を行った結果、一定の問題解決や改善がみられた。 ・講師に鈴木英太先生を迎えた教員人権研修会の講演「発達特性に応じた指導について考える」は、これまでの教員の実践を特別支援教育の視点で振り、これからの指導について考える良い機会となった。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の学びサポート室との連携による特別な配慮を要する生徒への支援は、評価できる取組みである。コミュニケーションや、人間関係の構築が苦手な生徒に対するサポートを引き続き期待する。 ・課題を抱えている生徒については、置き去りにされるケースが少ない社会の中、正面から取組み、成果は十分に上がっているものと思える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・担任、生徒指導部、養護教諭とさらに連携を密にし、窓口の整理など校内での運営体制を改善していきたいながら、多様な生徒への対応をしていきたい。
(4) 業務改善及び教職員の働き方に関する取組を推進する。	<ul style="list-style-type: none"> ・学校業務の現状を分析し、分掌組織の適正化、会議の精選およびITツールの活用等による業務の効率化を図り、働き方改革を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・現行の校務システムから、新しい校務システム「ツムギノ」への移行について、大学および納入業者と様々な準備と検討を重ねたが、結論として、現行システムのもつすべての機能を「ツムギノ」に移行するには別途多額の料金が発生すること、「ツムギノ」でできることに限定して移行すると、現在提供できている様々なデータや情報が提供できなくなることが判明した。よって、「成績管理」「出欠管理」「通知票」「調査書」「模試データ管理」等については、現行システムを継続して利用し、「ツムギノ」では出欠連絡および掲示板機能などのコミュニケーションツールを運用することとなった。現在は必要なデータの受け渡し完了し、今後は校内研修およびアカウント通知、保護者アカウント登録の通知を行い、令和6年度より運用を開始する予定である。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・校務システムのアップデートも必要だが、教員1人当たりの仕事量が過飽和しているように感じる。育友会活動、京附連活動においても、教員に頼り切っている面は、育友会として改善すべきだと考える。保護者への伝達ツールがプリントとWebサイトでは時代遅れである。令和6年度よりツムギノを運用を開始とのこと、なるべく早くの実施をお願いしたい。 ・働き方改革については、職種により可能なものや、思い切った改革をすることによりマイナス効果が発生する等、予算・人員が限られる中での取り組みであり、教育現場の働き方改革は非常に困難を伴うものと思われるが、焦らず、無理なく進めて頂きたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の適正な業務環境の維持するために、大学の方針に基づき働き方改革の推進を図りたい。 ・校務システムについては、最初に出欠連絡、掲示板機能の運用を開始し、順次利用可能な機能を運用していきたい。